

令和3年度第1回青少年問題協議会
ユースワーク推進部会 議事要旨

開催日時	令和4年2月10日（木） 午後1時～午後3時
開催方法	ZOOM を利用したオンライン会議
出席委員	両角部会長、竹田副部会長、今村委員、小倉委員、川野委員、李委員（委員は、50音順）
議題	(1) 尼崎市のユースワークにおける取組状況とその成果及び課題について (2) 令和3年度のユース交流センターの取組状況とその成果及び課題について (3) その他
資料	・ 資料1 本市のユースワークの取組み状況と成果及び課題 ・ 資料2 令和3年度ユース交流センターの取り組みについて

開会

- 出席委員（6名全員出席、部会成立）等の確認及び配布資料の確認

1 尼崎市のユースワークにおける取組状況とその成果及び課題について

- 資料1に基づき、事務局から説明

委員

事務局に確認です。本日、年度末の2月での開催となっていますが、今回の部会の開催趣旨は、3月に開催予定の全体会において本日の部会の審議内容が報告され、行政内の今年度の事業評価への反映と先程の説明で令和4年度向けの事業の説明がありましたが、来年度以降の事業への反映という理解で良いでしょうか。

事務局

本日の部会の議論の内容を踏まえ、市として今年度の事業の振り返りと来年度以降の事業展開の反映について、進めていきたいと考えています。

部会長

先程の説明で尼崎市のユースワークのメインがユース交流センターであるということが分かりました。ユース交流センター発で様々な取り組みを展開していくというのは素晴らしいと思います。その中で木育推進事業を事業化した背景や経緯について教えて下さい。

事務局

木育推進事業については、令和2年度より事業の取り組みを行っています。森林や木製品の良さや利用意義を学ぶことを目的とした事業で、木製玩具を保育所に配布したこともあります。その中で木

材を利用したワークショップを企画していたところ、スケートボードができる場所を作りたいと市に提案してきた若者やユース交流センター利用者の声を受けて、木製のセクションを作成することになりました。

委員

年度途中に若者の声を拾い、予算的な措置も工夫されて実施したものであると理解しました。若者主体の事業推進が進んでいるという印象を受けました。

委員

ユースカウンスル事業について、中間報告の場に参加しましたが、他市と違い行政に提案するだけではなく、既に動いている点が進んでいると感じました。また、ユース交流センターや行政の関係各課と繋がる中で若者が進めていったことに驚きました。そういった意味でユースカウンスル事業は、ユース交流センターと若者達の間で、良い意味で一定完結し、行動までできているのではないと感じています。従って、先程の説明のこの事業と行政のかかわりについてと聞かれても、質問の趣旨がよく分かりませんでした。若者の個別の課題をどうしていくかといったこともあると思いますが、行政としてあらゆる施策について若者の声をどのようにして取り入れていくのかを行政自身が考えて欲しいと思いました。

また、ユースワークの取り組みの9割がユース交流センターの取り組みという説明がありましたが、心許ないと感じました。ユースワークの殆どの部分を指定管理者に任せて良いのか、行政としてユースワークをどのように進めるのかといった点が今日の資料からは見えてこなかったことが気になりました。

事務局

今回、提示したテーマは、率直に市としてどう関わっていくべきなのかと感じていたため、提示させていただきました。現状、ユースカウンスルに対する行政の関わりが薄いと感じており、大部分、指定管理者任せになっていると感じています。指定管理者の負担を踏まえ、このままでいいのかと考えており、部会の皆様のご意見をいただければと思います。

委員

センター長にお聞きします。市と指定管理者と若者の3者の関係で何か課題があるか、現場でどのように感じていますか。

ユース交流センター

市が今回、課題としてあげてきた背景には、当初の想定とずれが生じたところがあると考えています。当初は、こども青少年課を中心に市職員がメンターとしてユースカウンスルに関わっていくという想定でスタートしました。しかし、参加者が取り組みを進める中で、個別の悩みを聴く際に、若者達が空いている時間と市役所が開庁している時間が違う状況の中で、ユース交流センターのスタッフがメンターとしての役割の大部分を担うことになりました。市職員は、若者が取組みを進める中で、市の関連部署に調査や確認の必要が生じた場合に、若者と市の関連部署を繋ぐ役割を担うことになりました。結果的には、当初の想定とは異なりましたが、役割分担が明確化されたという意味では良か

ったのかなと感じています。若者達からは、これまで無かった市職員や市長と話す機会を持つことができたといった声を聞いています。その点については、市職員にうまく調整いただいたのではないかと感じています。

委員

市と若者と指定管理者がどのように関わるべきか、その点について、委員の皆さんのご意見をお聞かせ下さい。

委員

今年度、役割分担が進んだということであれば、若者達が動いたということ自体は評価しても良いのではと思います。今後は、現在参加しているメンバー以外の若者の参加を進めていくことや若者の声が行政施策に反映され、市民に還元されるといった循環が見えてくるということが大事だと考えます。自分達だけの課題や自分達のやりたいことだけが解決されたり実現されたりするのではなく、全市に還元されるといった手応えが見えてきたり、伝わったりすることが大事だと考えます。そういった意味では、行政が集まり、若者の声を届ける場を設定したことは、大きな意義があったと思います。また、声を受け取った行政側の影響がどうだったのかは行政内部で聞き取りをしていただきたいと思います。来年度以降、若者達の声がこんな形で反映されましたということをカウンスルのみならず広く全市にフィードバックしていくことが必要であると考えています。ともすれば、行政施策に若者を使う、若者の声を聴いただけの構図は避けるべきです。若者発の視点が市政に生きたということを伝えていくような見せ方や行政内部の聞き取りをお願いしたいです。

委員

まさにロジャー・ハートの「参加のはしご」を絵に描いたような論点ですね。事務局でもこの意見を反映させてもらえれば有り難いと思います。

委員

若者が集い、発信し、提案していくことは継続すべきだと思いますが、特定の決まったメンバーだけではなく参加する若者を増やしていき、色々なエリアで日常的に若者の声が聴けるようになれば良いと思います。また、行政がどのように関わっていくという点については、市が実施しようとする施策に対して「若者の立場からどのような考えを持っていますか」といった、若者に諮問するといったものでも良いのではないかと考えます。行政計画の策定する際や、若者の方がより長く関わっていく事柄等、焦点を絞って若者の意見を聴くのも必要かと考えます。

委員

ユースカウンスルも0期から1期に入ることですが、参加する若者の数が限られるといった問題提起がありました。来期の運営方法や参加者の巻き込み方法について、今期のやり方を踏襲するのか、変更を考えているのか教えて下さい。

ユース交流センター

詳細については、この後の議題2のところで報告しますが、現時点では、若者が集まり若者の声を

もっと大きくしていきたいという取り組みについては、1期、2期というように期を決めながら活動していきたいと考えています。一方、スケートパークを作りたい、児童虐待についての啓発を進めたい、といったそれぞれの活動については、期を定める必要はなく、大学に進学しても継続的に続いていくものだと考えています。若者が集い、声を大きくしていくという取り組みと、具体的に取組を進めるといった取り組みというように2極化して進んでいる状況があります。

部会長

先程の別の委員からも指摘がありましたが、ユースカウンスルは、大人と若者の関係性を一方的に決めるものではなく、一緒に紡ぐ、作っていくといったものだと考えます。行政の事業としてしまうと、ある程度の枠組みを主体に考えがちになりますが、ユースカウンスルは、脱事業化し、自治の中間支援にもっていくといった考えがあれば良いと思います。事業として考えてしまうと我々大人の論理に若者が乗っかるということになりがちですが、そうではなく、若者が民主的に物事を決め、影響力を発揮し、何か変えられていると若者が実感を持てる状況を作っていくだけで良いと考えます。その時々で、どうしたらより多くの若者の声を届けられるかを考えていくことが大切です。従って任期や、引退の時期、統治方法についてもカウンスルのメンバーで決めればいいのですが、やり方や良い事例について知らない場合もあります。その際にユース交流センターのスタッフや市職員がアドバイスをすればいいと考えます。また、別の委員も仰っていましたが、意見が多元化できるようにしていくことも大切です。ユースカウンスルもある程度進んでいけば、学校推薦でメンバーが集まってきがちです。イギリスのユースカウンスルでは、メンバーに真面目な若者しか集まらず、真面目な生徒会のようになってしまう、ユースワークからかけ離れ、格差化されてしまっています。そうならないようにアウトリーチやストリートユースワークにより関係性を築いていくことが重要であり、その意味で、ユースセンター起点で実施していくことは非常に大事だと思います。

委員

次に先程、委員より提起がありました、市のユース政策の全体像について、これで十分なのかという点について、事務局の考えをお聞かせ下さい。

事務局

先程の資料の説明の中でユース交流センターが9割と言いましたが、イメージとして現場としては9割担っていただいているという趣旨でした。勿論、施策的な部分では、市が主体で取り組んでいかなければならないと考えています。しかし、現場の殆どをユース交流センターが担っていただいているという点については、ご指摘のとおり検討していく必要があると考えています。

委員

現場は勿論、政策的にも9割担っているのではという感覚です。次の議題の中でも提起がなされていますので、そこで議論したいと思います。

部会長

それに関してですが、最初、ユース交流センター発で様々な取り組みを展開していくというのは素晴らしいと言いましたが、取組の始まりとして、ユース交流センターが発信するのは良いという意味

です。「会議体ばかりで現場が無い」よりは断然良いと思います。先程、委員が指摘されたように担い手が多元化していく必要はあると思います。ユースセンターのような箱物だけでは心許ないので、若者団体の中間支援やストリートワークを行うことも考えることも重要だと思います。

委員

ユースワーク全般について考えると、18歳で成人となることから、主権者教育、シチズンシップ教育といった観点が学校教育でも注目されており、今後、学校教育の中でどう位置付けるのか、どう学校と連携していくのかが重要な論点になると考えます。政治主体として子ども達が市の政治や施策に関わっていくということが、18歳から選挙権が付与されたことにおいても重要なトピックスだと思いますので、それに絡めていっても良いのではと思いますし、そういった観点からも市全体にどのように広報していくのかということも論点になると考えます。地元出身者の感覚としては、「私たちの尼崎」を小学校の頃から大変親しみを持って近松門左衛門などを勉強していましたので、尼崎の中で色々な事柄について子ども達が勉強できるのではないかと考えています。一般的にシチズンシップ教育の文脈で子ども達にいきなり行政の施策に関わってと言っても難しいため、いかに子ども達の政治的リテラシーを高めていくのかを権力的な形にならないように取り組んでいくのかが重要だと思います。

委員

昨年度、市立高校2校とユース交流センターのスタッフが意見交換を行ったとお聞きしましたが、それについて、詳細な報告をお願いします。

ユース交流センター

昨年度、市内にある市立高校3校の内、2校にお伺いさせていただきました。昨年度の部会において、学校等との関係機関との関係性の必要性や直ぐに関係性を築けるものではないといった議論がありましたが、しっかりと顔の見える関係性を築いていくということを目的に、学校のトップである校長先生、教頭先生にセンターの活動内容と学校と連携するとなれば、どのような連携方法があるのかということ協賛させていただきました。コロナ禍の中で学校としてもどんどん学校外に飛び出していこうと言えない状況にあることから、「直ぐに何かやっていきましょう」ということにはなりませんでした。良い顔繋ぎになったと思います。

委員

学校連携については、引き続きこの部会で重要なテーマとして議論を続けていければ良いと思います。これまでの議論を踏まえ事務局として補足やまとめ等ありますでしょうか。

事務局

当初こちらが想定していた議題以外にも議論が拡がり、大変参考になりました。ユースカウンスルにおける行政のかかわり方については、この取り組みが始動して1年余経過しましたが、行政としては、まだまだ手探りの状況にあることから、部会委員の方のご意見をお聞かせいただきたいという考えで今回、テーマ設定させていただきました。議論にありました「若者が民主的に物事を決め、影響力を発揮し、何か変えられていると若者が実感を持てる状況を作っていく」ということを若者に実

感してもらえるよう進めていければと思います。また、若者に諮問するといった議論もありましたが、子ども若者施策を所管する我々だけではなく、市役所全体が施策推進の際に若者の声を聴くといった意識をこれまで以上に持つように担当課として進めていく必要があると思います。また、市のユースワーク施策全般に係る議論もありました。スタートはユース交流センターからの発信で良いが、それだけになっては不十分であるといった指摘や、担い手を多元化していく必要があるという点については、担当課として考えていく必要があると思いました。さらに学校連携については、今後も部会の中での議論を踏まえ、進めていく必要があると思います。

委員

やはりこの1年は、コロナ禍で全ての活動が停止してしまいました。その中でユースカウンスルが立ち上がり、木育推進事業の予算を活用してスケボーの場所を作ったというリアルな活動があったというのは及第点ではないかと感じました。これが2期、3期と続く中で事業がコミュニティになり文化になっていくといったフェーズになっていくと思います。そのような中でユース交流センターがどのような役割を果たしていくのか、そして、市とどう連携していくのか、学校とどう連携していくのかがさらに重要になると思います。では、そういった観点も踏まえて、議題2に移ります。

2 令和3年度のユース交流センターの取組状況とその成果及び課題について

●資料2に基づき、ユース交流センターから説明

委員

最初のテーマである「ユース交流センターの今年度の取り組み状況等について」、事業評価の観点も踏まえてご意見をいただければと思います。

委員

とても精力的にやられていると感じています。利用者数について、貸部屋の利用者数の割合が多いようですが、ここを利用する若者が自主的な活動をしていると捉えるのであれば、先程の説明では、そういった若者との繋がりや関係性に関する説明がありませんでしたので、若者が何を求めて来所しているのか知りたいと思いました。

ユース交流センター

貸部屋の人数が多くなっているように見えていますが、これは、大人向けの講演会が多く、100人規模の講演会も行われていることが要因としてあります。単純にここでの人数が若者という訳ではありません。若者に一番人気のある場所は、音楽スタジオで、音楽ニーズが高いことが背景にあります。但し、スタジオを利用して終わりではなく、利用の前後にオープンラウンジを利用する中で我々スタッフと関わりを持つ中で、若者の「このようなことをやりたい」といった声を聴き、関係性を築いていく中で一緒に事業にしていったり、ユースカウンスルへの参画やその他のイベントに繋げていったりしている状況です。特に音楽スタジオはグループ登録しないと利用できませんが、1人でドラムやギターの練習をしたい若者もいます。そのような若者の声を聴きながら、オープンラウンジにドラムセットを設置したり、ギターの貸出を行ったりしました。その点では、若者の声を拾えているのかなと考えています。

委員

利用者について、昨年度と比べて市内17中学校からの利用は広がっていますか。また、全ての中学校から利用がありますか。また、相談事業について、ユース交流センターが関わり専門機関等の支援に繋がった人数について教えてください。

ユース交流センター

中学校の状況については、昨年度から広がっている状況にはなく、近隣の中学校からの利用が多いです。センターから距離が遠い中学校からの利用は、ほぼ無い状況です。高校生については、距離が遠くでも利用があります。相談については、ユース交流センター発で支援に繋がった事績は、それほど多くなく、把握しているだけで10名程度です。ただ、最近はスクールソーシャルワーカーや子育てコミュニティワーカーが、若者と一緒に居場所としてユース交流センターを利用するケースが増えています。そこで、若者が我々スタッフと関係性を築き、ワーカーが知らなかった情報を我々スタッフが知り、関係機関に伝えるといった連携が増えています。

委員

利用者の質、量について、昨年度と比べどのような変化があったのか教えてください。

ユース交流センター

量については、昨年度とそれほど変化はないと思います。最近は2カ月前からは高校生の利用が減ったように感じています。理由としては、コロナ禍の状況の中、受験生が来なくなったのではと感じています。質については、活動するというよりも悩みを抱えたり、支援者から繋がって利用を開始したりして、悩みを聞いて欲しいといった層が増えてきていると感じています。

委員

他の施設でも高校生の利用が極端に減った傾向が見えています。コロナ禍において全国的な傾向なのかもしれません。また、相談の場所としての重要性が増している点も参考になりました。

委員

私が、虐待や貧困の子どもの支援をしているので、気になったのは、重い相談が多いと感じました。以前、ユース交流センターを見学させていただきましたが、スタッフの方が非常に丁寧に場づくりをされ、若者と接しているからこそ、このような相談があるのではないかと思います。これは、日々の関わりの成果ではないのかと考えます。一方、重い相談があるとスタッフの方が個別に対応しなければならないことが増えていくのではないかと思います。今後、相談件数が増えれば、スタッフの負担の増えていくことから、今後、関係機関や他の居場所や支援を行うNPOとのリファー（他の専門家への紹介）がかなり必要になってくると考えます。今後、相談が増えることは確実だと思いますので、ユース交流センターがユースワークもしつつ、ソーシャルワーク、ケースワークの全てを担うことにならないよう、市としても全体的に役割分担をしていく必要があると思います。

委員

ユース交流センターの現場の負担については、どう感じていますか。

ユース交流センター

ユース交流センターが開設され3年目になりますが、昨年度も福祉関係との連携が不足しているということで連携を始めたところです。担当者同士の顔繋ぎから始めているところですが、連携に若干時間が掛かったり、上手く遣り取りできていなかったりという部分もありますが、顔の見える関係になってきているので、上手く連携し始めているのではと感じています。先程、指摘があった通り、相談件数が増えていった場合、スタッフの体制については、考える必要があると思います。また、今のスタッフの研修についてもレベルを上げる等、考える必要があると思っています。

委員

ユースワークもしつつ、ケースワークも行うということはとても専門性が高いので、その分野のスーパーマンがいないとできないと感じています。上手く担当部署と連携すべきだと思います。また、ケースの主担当にならない方が良いと思います。恐らく家族支援が必要なケースが多いと思いますし、長期の伴走が必要なケースもいるので、この辺は、スクールソーシャルワーカーや福祉部門との役割分担ができれば良いと思います。顔繋ぎが上手くできて、関係機関へのケースの紹介ができるようになればなるほど、相談件数は増えると思います。そうすると、子ども若者達とスタッフとの関係が希薄になり、繋がりに難くなり、また孤立してしまうということになりがちになると思います。この辺が尼崎特有の難しいところだと思います。

委員

事務局にお聞きします。指定管理者の仕様に有資格者の配置は無いと理解していますが、如何でしょうか。また、行政として課題を抱えた子ども若者達を支える拠点として、どの程度の期待を持っているのか聞かせて下さい。

事務局

ユース交流センターがある「ひと咲きプラザ」には、困難を抱えた子ども達を支援する「いくしあ」と呼ばれる子どもの育ち支援センターが設置されています。ユース交流センターで関係性を築く中で子ども若者の困りごとを拾い上げ、「いくしあ」に繋いでもらえればと考えています。その後、「いくしあ」の児童ケースワーカーが、中心となって対応していければと考えています。

委員

ユースワーカーには、抱え込みがちになる方も多いのではないかと想像しますので、担当課やセンター長の方でブレーキをかけるように意識すれば良いのではないかと思います。

委員

情報を共有したり支援したりする時に対象となる子ども若者の個人情報が出されていくことになっていきますが、それを出す裏付け、根拠はどうなっているのでしょうか。私も実践する中で気になることなので聞いてみました。

事務局

ユース交流センターで取り扱う個人情報については、条例等の裏付けがある訳ではありません。市として「個人情報保護条例」を制定していますので、取得した個人情報は、適切に管理することが求められていますが、それ以上の定めはありません。子どもの育ち支援センターでは、困難を抱えた子どもや家庭の支援を総合的に行う拠点施設となっていますが、「子どもの育ち支援条例」で、困難を抱え支援を必要とする子どもについては、個人情報の目的外利用を可能とする規定が設けられています。この規定により虐待を受けたり、いじめを受けていたり、不登校の子どもについては、子どもの育ち支援センターで情報共有がなされています。

委員

規則に縛られ目の前の子ども若者を助けられないというのは、本当に無意味なことだと思います。一方で、個人情報を守っていくということも大事だと思います。子ども若者が蚊帳の外になってしまう中で動いていくのも良くないと思います。その中で社会教育系の施設では、個人情報の関する枠組みや整備が遅れていると思います。私が関わっている案件でもきっちりとしたものが無く、後ろ盾となる根拠が無い中で、どの様に連携していけば良いのか、曖昧なところが日本社会の課題だと思います。

もう一点、ユースカウンスルとユース交流センターのユース運営委員会は、メンバーが重なっているのか重なっていないのか、それぞれの会議体の特徴が知りたいです。

ユース交流センター

現状、メンバーは全く重なっていません。ユース運営委員会については、ユース交流センターによく来ている、毎日来ているメンバーが殆どであり、不登校やスタッフと話がしたいといった利用者が多いです。ユースカウンスルについては、自分の課題や社会の課題を市に提案したいといった思いを持つ若者が多いです。特段、両方を分けている訳ではありませんが、現状、メンバーは重なっていませんし、それぞれの会議体に参加しているメンバーが求めるニーズが若干違うのではないかと感じています。

部会長

運営委員会を隔週で開催しているとのことですが、相当な頻度だと思います。現在、全国の国公立施設の調査を行っており、運営協議会のことも聞いていますが、開催回数については、年間1～3回が85%を占めています。そのような中でユース交流センターのユース運営委員会は、上位1.2%に入ると思います。さらにメンバーが10代で構成されるということも非常に珍しいです。運営協議会メンバーの年代で1番多いのは50代という中で、ユース交流センターのユース運営会議は、非常に先進的であるということが分かりました。その中で先程、委員からも指摘がありましたが、ユース交流センターのスタッフの負担が気になります。その点、十分な人員体制なのか、必要な予算が割かれているのか教えて下さい。

ユース交流センター

ユース運営委員会のメンバーは、殆ど毎日来所しているので、開催しようと思えば、毎日開催できるというのが実態です。ユース交流センターに愛着があるため、もっと良くしたいという思いで参加

してくれています。その中で2週間に1回としている理由は、スタッフの負担軽減もあります。いつでも開催はできるとなれば、スタッフが毎回入れなくなる可能性もあることから、しっかりと話を聴く回とそうではない回を決めましょうということにしています。運営会議の中でも代表等の役割を決めようという提案はしていますので、それが進めば、我々が関わりを離していくことになると思います。また、ユースカウンスルについても代表を決めており、我々スタッフが参加しないミーティングも行うようになってきます。一つの活動として自分達でやっていこうという機運が高まれば、自主的に活動が進んでいくと思いますが、時々、我々スタッフが入って良い刺激や色々な視点を入れながら進めていければ面白いのかなと思っています。

委員

来年度実施に向け準備中というヤングケアラー支援について、ユース交流センターの利用者の中で声があるのか、お聞かせ下さい。

ユース交流センター

この4月から事業化の予定ですが、それに先立って、スクールソーシャルワーカー、子育てコミュニティワーカー及び我々ユース交流センターとで、ヤングケアラーの当事者が集う場を作ろうということで、2カ月に1回程度の頻度で開催してきました。参加者は、ユース交流センター経由、スクールソーシャルワーカー経由で集まってきており、20名以上の参加があります。また参加したいという声や楽しみにしているという声があります。来年度の事業実施団体は決まっていますが、今年度の内容を継承して欲しいと思っています。

委員

では、次のテーマである「ユースセンターの価値を一般市民の方に知ってもらうためには？」に移ります。説明をお願いします。

●資料2（13ページ）に基づき、ユース交流センターから説明

委員

先程、今年度の取り組みのところで説明がありましたユースワーク研修についてですが、研修の目的、対象者について教えて下さい。また、この研修に講師として参加されている委員の方からも何かあればお願いします。

ユース交流センター

市内にユースワークを広めていくというところでは、市内各地区でユースワークを知らない一般の人向けにユースワーク説明会を開催しています。当事者として関わりたいという方については、専門的スキルが必要になるため、ユースワーカー協議会にご協力いただきユースワーカーとしての基本的なスキルを身に付けていただくためのユースワーカー養成研修を実施しています。

委員

尼崎市で子ども食堂や若者向けの居場所を運営したい、運営しているといった思いを持って活動し

ている方に参加いただいていると思います。ユースワークは拠り所のない実践ではありますが、その中で概論的な話や自己理解やコミュニケーション、グループワーク、事例検討を行い、パッケージで基礎を抑えるといった形で2日の講座を実施しています。この研修は、確認学習のような形で使っているというのが現状です。ユースワーカーとして、ボランティアでもプロフェッショナルでも若者と関わっていきたいという方が参加されていますので、可能性も含め、ユースセンターやユースワークの価値を感じている方が参加していると思います。

委員

尼崎のユースワークやユースセンターの役割は、福祉的な要素と自由や余暇の要素の両方あると思います。福祉的な要素は、「いくしあ」や設置を予定している児童相談所を行政もユース交流センターも自然とうまく利用していくと思います。また、課題先進都市ということもあり、市民の理解も許容度も学校の先生の理解も大きいと思います。しかし、自由や余暇となるとそうはいかないと思いますが、寧ろ、そちらの方をもっと今後、市民に伝えて欲しいと思いますし、我々も学びたいと思います。ユース交流センターが単に中高生年代の福祉のサポートを担うだけではなく、自由や余暇を担う、何をやっても良いし、何もやらなくても良い場所だということがまだ認知されていないと思います。学力向上だと言われて子ども若者達がしんどくなっている中でユースワークをサテライト事業で展開しているというのは大きいと思いますが、ユースワークの価値に対する理解が行政内部や保護者、地域の人に浸透していないと感じています。従って、余暇や自由の価値をどう広めていくのかについては、行政に主体的に行って欲しいです。また、ユース交流センターや他市の実践の内容について知りたいです。

委員

私の所属する団体で運営しているセンターでは、乳幼児から大人まで利用できますが、ユースワークや余暇の価値を伝えるために毎月発行している広報誌に月間プログラムを掲載しており、それを見て事業に参加される方もいます。この広報誌は、小中学校には配布するようにしています。そのトップページにはセンター長のメッセージを掲載していますが、その中で前月に実施された事業の中から見えてきた子ども若者が主体的に活動の様子や余暇を享受している様子について、エピソード等を添え紹介しています。そうしたことにより、余暇の価値が少しでも保護者の目に触れ、大事にもらえる良いと思います。また、学校の先生にも見てもらい、その価値が伝わるようにしています。尼崎市は市を挙げて取り組もうとされていますので、4月5月頃に小中学校でオリエンテーションを開催し、センターの存在や事業内容についてスタッフが説明する時間を作れば効果があると思います。また、社会科見学の見学先にしてもらうのも良いと思います。私も計画していますが、一般市民に対しては、子ども100番を担っている方や民生委員に施設を訪問してもらい、施設オリエンテーションの開催を通じてこの施設をこのような子ども若者に利用して欲しい、このように利用できると説明しても良いと思います。その上で周囲の家庭や子ども若者への周知を依頼するのも良いのではないかと思います。

委員

私が子どもの頃は、学校に行って部活してアルバイトに行っている同級生が多かったです。休みの日は、ゲームセンター、ボウリング場、カラオケ、大阪、神戸、伊丹に遊びに行っていました。子ど

も若者達を何処で補足するのか、難しいと思います。それを考えた時、子ども若者へのアウトリーチとしては、学校がひとつポイントではないかと思います。学校の先生の理解がどこまであるかということもありますが、例えば部活に絡めて、ユース交流センター主催のイベントやカップ戦を開催するといった、参加せざるを得ない、又は、参加したくなる事業を開催しても良いのかなと考えていました。尼崎市の子ども達の多くは少年野球、合唱、空手をやっているという印象があります。そのネットワークの活用やネットワークへのアプローチを考えても良いと思います。

部会長

先程から各委員が話されていることは、子ども若者へのアウトリーチに関することだと思います。各委員も現場で色々実践されていると思いますが、学校連携、オンライン、ストリートワークといった実践も参考になると思います。ユースワークを一般市民に知ってもらうためには、社会的な認知度や認識を高めるためのアプローチが必要だと思います。これは、ユースワーカー協議会が取り組んでいることのひとつです。また、子ども若者支援専門職の活動や研究も非常に参考になると思います。これらの取り組みが連携し、ユースワークに関する知識を固め、発信し、その結果、研究者が育っていき、実践へと繋がっていくのだと思います。これをやっていかないと市民への認知度は高まっていかないと思いますし、行政が施策を予算化する際に説得力が持てない場合もあると思います。一方、ヨーロッパでは、専門職化によるユースワークの価値観の喪失が指摘されており、この点は気を付ける必要があります。ユースワーカーがユースワーカーになっていけばいくほど、支援者と被支援者に距離が生じてしまいます。この微妙なライン、グレーゾーンに我々は立っていると思います。

委員

ヨーロッパでは、余暇の要素より支援の側面が強くなっているということでしょうか。

部会長

支援に偏ってしまったということです。

委員

尼崎市ではどのようなバランスが良いのか、今後、部会で議論できれば良いと思います。

委員

この部会での議論を踏まえて尼崎市としてどうしていくのかが見えてくれば良いと思います。ユース交流センターが設定される前から地域においてユースワークの啓発に関わってきましたが、市民の立場から申し上げると、現状は、市の施策の中に単にユースワークという言葉が入っただけの印象です。尼崎では課題が山積しているため、結果として「いくしあ」やその他の機関の連携の中でユースワークの福祉的要素の方向に進んでいっていると思います。しかし、尼崎に必要なのは、余暇支援、自由といった価値や文脈でユースワークを広げることだと思います。学校の規範が幅を効かせている中で、行政としてユースワークという言葉掲げ、ユース交流センターという「場」を設けましたが、今後、教育委員会等にどう発信していくのか、気になります。

委員

現場で何を大事にしているのかという価値ではなく、社会的評価としての価値の位置づけが求められていると思います。尼崎でも地元企業や個人事業主の方等、「尼崎が好き」と思っているような町の応援団が、「若者が思いきり遊べるユース交流センターって良い」と思ってもらえることが大切だと思います。ユース交流センターで利用者向けのパンフレットを作られているということですが、大人に伝わる言葉も含めて作られると良いと思います。京都・山科のセンターでは、地域の中小企業が作ったユースセンターだという認識があり、運営協力会の皆さんが、様々な物を寄付してくださったり、協力を申し出てくださったりしています。そういった関係作りがこれから必要になってくると思います。

部会長

現在、青少年教育という領域に身を置っていますが、自然体験や野外教育ばかりで良いのかといった議論になっています。そういった中で昨年、東京都では、ユニバーサルアプローチとしてのユースワークを審議会の建議で立ち上げるとしており、自治体レベルでもかなり広がってきています。「実態を先行しながら、かつ、施策も進める」といった両方で動いていくというトレンドの中に尼崎もあるのではないかと考えています。また、先程からお話ししているアウトリーチですが、その方法は、色々あると思いますが、その手前に「こんな価値があったよな」といったアーカイブがとても大事だと思います。具体的には、日々の現場で様々な若者と関わった時のストーリーや価値が表出する瞬間があると思いますが、それを記録して発信していくことは、とても大事だと思います。世田谷区では、色々な方法で行政とユースセンターがかなり連携して色々取り組んでいます。その一つに「若者の声をひろうプロジェクト」というものを実施しています。世田谷区のシンポジウムに参加した時に会場内で見たのですが、各ユースセンター等で若者の声を集め、貼り出していました。我々は、利用者数といった大人向けの資料はたくさん作れますが、このような把握支援方法はあまりできていなかったと思います。また、ユース交流センターのスタッフがYouTubeで色々発信していますが、素晴らしいと思います。現場の声や若者の声が響いているということを発信していくことが、社会的影響力を高めることになると思います。その上でテクニカルなアウトリーチを行っていく必要があります。「こんなことがあった」といったストーリーを積み重ねていくという視点から繋がっていくのだと思います。

3 その他

●事務局から今後のスケジュールについて説明

部会長

これもちまして、ユースワーク推進部会を終了させていただきます。

閉会

以 上